

## 楽劇「ワルキューレ」第1幕

渡辺護

このディスクはワーグナー演奏の最も貴重な記録のひとつである。20世紀最高のワーグナー指揮者といわれるクナッパーツブッシュが指揮し、フラグスタート、スヴァンホルムという二大ワーグナー歌手の協演を聴くことができるからである。しかもこの3人ともすでに世にない。

また「ワルキューレ」は「指輪」四部作中でも最もすぐれた作品とされるもので、上演回数も多く、レコードも名指揮者たちの名演が多数でている。しかしクナッパーツブッシュの解釈はそれらに対していわば別格的の存在である。前奏曲だけを比較しても判る通り、ここには骨の髄までワーグナーを理解し、楽劇の美をきわめつくした指揮者の表現がある。表情の幅も大きく、内面的な美しさを雄大に表現して行く解釈は、まったくワーグナーにその生涯を打ちこんだ人でなければ実現不可能であろう。

またこのディスクは「ワルキューレ」第1幕だけであるか、これをもって中心半端なレコードと難ずるのは不当である。なぜならこの第1幕はジークムントとジークリンデの愛を主題として、内容は最高度に充実しており、全体にもよくまとまり、これだけ引きはなしても充分にききごたえがあるからである。それどころか、評家によってはこの第1幕こそワーグナー全作品を通じて最も美しい音楽であるとする人もある位で、密度の濃い、手法の円熟した染作である。

### ● 曲目解説

**前奏曲。**ジークムントが敵に追われ、嵐の中を逃れ行く、という開幕前の物語が音楽として表現される。はじめ弦だけで単純な嵐の動機がくりかえされる。森の奥にあるフンディングの小屋でははげしい雨が屋根をたたく。強い風の中に、ついに落雷。雷鳴も次第に遠ざかり、ジークムントはフンディングの小屋に辿りつく。

**第1場** 幕があくと、フンディングの小屋の中、ジークムントが疲れはて、倒れている。若い女が家の中から出て来て、ジークムントに水をあたえる。女はこの家の主フンディングの妻ジークリンデである。ジークムントはこの家に禍の訪れるのをおそれて、去ろうとする。

この若い2人の対話も、もっとも簡潔な音楽で表現される。この第1場は2人の愛の動機が主となって構成されているが、中でもジークムントが水をのみほしたあとの、チェロ独奏の動機は美しい（ウィーン・フィルの独奏チェロは実にすばらしい！）。さらにジークリンデは彼を元気づけるために密酒をあたえる。音楽は弦と管との豊かな合奏となって、2人の愛の情感は高められる。

**第2場** フンディングが帰って来る。この場の前半ではおびやかすような「フンディングの動機」が中心となっている。フンディングはジークムントの目に妻と同じきらめきを見る。このあたりからバス・クラリネットが重要な意味を持って用いられる

ようになる。フンディングはジークムントにみづから名をのるよう要請する。

ジークムントは自己の身の上を語る。

敵との戦いの中に彼は父を見失い、母は殺され、妹も行方不明になった。ジークムントは敵がフンディングであることを知らないが、管弦楽は「フンディング」の動機によって、これをほのめかす。ジークムントが父を失ったことを語ると、金管が「ワルハラ動機」(ウォータンをも意味する)を奏して、その父はウォータンであることを伝える。

ジークムントの話をきくうちに、フンディングは、この語り手こそ自分の敵であることを知る。しかし獵人仲間のおきてにより、武器なくして逃げ込んだ者には、たとえ敵であるとも夜の宿を貸さねばならない。フンディングは、明朝の戦いを約して寝につく。

フンディングの去る前に、木管と低弦との対話による美しい間奏がある。フンディングとともに席を立つ、ジークリンデの心残りの動作が美しく、音楽であとづけられる。トランペットによる「剣の動機」がかすかに現われ、彼女がつけようとしているものを暗示する。

**第3場** ジークムントひとり、彼は父が自分に約束してくれた霊剣は一体どこにあるのかと独白する。ジークリンデが、眠ってしまったフンディングの床を離れてやってくる。2人は不思議な力にひかれて、たがいに愛しあうようになっていたのである。

ジークリンデは身の上を物語る。

彼女は力づくでフンディングの妻にさせられたのである。その物語りから2人は父を同じくする兄妹であることを知る。「フンディングの結婚の酒盛りのとき、見知らぬ片目の男がやって来て、檜の木に剣を刺して行きました。だれもこれをぬき取ることができなかつたのです」。この男こそ彼女の父ウォータンであった。金管がおごそかに「ワルハラ動機」を奏して行く。「剣の動機」は急激に高まる。

戸が一陣の風によってあけ放たれ、(ハーブの音) 春の月光のさし込む中に2人は愛を語る。まずジークムントの愛の歌。先程の「嵐の動機」が今や「愛の動機」に変って行く。ジークリンデも加わり愛の二重唱となる。今までひかえ目に使われていた管弦楽は、しだいに豊麗なひびきを増して来る。ここの半音階的な音の動きはのちの「トリスタンとイゾルデ」を予感させる。

ジークムントは檜の木につきささった剣を見事にぬき取る。ふたりの父ウォータンがこの剣をジークムントのために置いて行ったのであることをさとる。ふたりは逃亡することを決心する。若き英雄の喜びははげしい終曲となるが、最後から一つ前の九の和音が苦しい叫び声をあげて、明日に迫るジークムントの不幸な運命を予感させる。

ところで「ワルキューレ」は舞台装置に於てもすばらしい効果を発揮するよう作られているから、ディスクで聴く場合にもよく舞台を頭の中に浮べて聴くことが望ましい。事件と内面的経過と舞台面とがいかに緊密な関連を保っているかは第1郡だけを見ても判るであろう。はげしい嵐の中にジークムントはフンディングの小屋に辿りつくが、これは彼の心的状況に相応し、嵐は次第に収まる。第2場ではフンディングが敵

であることが判り、ジークムントの事態は次第に危険になる。夜の闇が次第に濃くなって来る。第3場ではジークムントの運命は絶望的なものになる。闇夜となる。この闇の中に、かまどの光に照らされ霊剣が光る。これはジークムントの心の中の希望の燭光だとも云える。ジークリンデが入って来る。戸が開いて春の微風と月光が入る。恋の場面。と云った具合である。

## ●アーティスト紹介

### ハンス・クナッパーツブッシュ

この大指揮者が他界してからすでに20年以上の歳月が経過した。しかしその名声はますます高まりつつある。彼はついに我が国を訪れる機会がなく、またワーグナーの楽劇やブルックナーの交評曲が日本では比較的遅く一般化したため、彼の真価がわが国で認められるのは比較的遅かった。それだけに彼の残したアルバムはいづれも貴重である。

私が滞在していた1940年代のウィーンではクナッパーツブッシュは、フルトヴェングラー、ベーム、クレメンス・クラウスと並んでウィーン・フィルハーモニーの定期を指揮する選ばれたる指揮者のひとりであった。一般に指揮者の演奏様式が定型化し、標準化して行く現代に於て、個性の強いクナッパーツブッシュは全く独特な存在であった。極めて節約されたその身振りによって管弦楽団に自己の音楽を明確に伝えうる天才であったが故に、彼は練習に時間をかけなかったことも有名である。

彼は1888年3月12日エルバーフェルトに生まれた。家は古いベルギー人の家系である。ハンスは12歳のとき学生管弦楽団を指揮して天才ぶりを発揮したが、両親の反対にあって容易に音楽家の道に進めなかった。ボンとミュンヘン大学の哲学科に学び、卒業論文は「ワーグナーのパルシファルにおけるクンドリー」であった。

1909年から12年までバイロイトのワーグナー音楽祭の補助指揮者をつとめたが、ここで彼はワーグナーの息子ジークフリート・ワーグナーや名指揮者ハンス・リヒターから直接指導をうけることができた。1910年ミュールハイム劇場の指揮者としてデビュー、1912年、1913年にオランダのワーグナー祭の音楽監督として指揮した。また1912年24歳のとき生地エルバーフェルトの劇場音楽監督となり、1914年には「パルシファル」を指揮した。1918年ライプチヒ市立歌劇場に短期間つとめたのち、1919年デッサウのフリードリヒ劇場の指揮者となり、ゲネラル・ムジーク・ディレクターの称号を得た。1922年ブルーノ・ワルターの後継者としてミュンヘン国立歌劇場の指揮者となり、まず「トリスタンとイゾルデ」を指揮した。バイエルンの首都ミュンヘンはクナッパーツブッシュの生涯にとって最も密接な関係があり、彼はこの劇場の終身指揮者に任じられた。

ところが1935年ナチスとのおりあいが悪く、この終身職から「追放」されてミュンヘンを去り、ウィーンに移った。ウィーンで1938年から国立歌劇場の指揮者もやり、またウィーン・フィルハーモニーを定期的に指揮した。

戦後1945年再びミュンヘンに帰ったが、意外にも連合軍から出演禁止をいい渡され

た。しかしそれも間もなく止んで、ミュンヘンやウィーンを中心に指揮活動をつづけた。1951年からは毎年バイロイトで「パルシファル」や「ニーベリングの指輪」などを指揮したが、65年10月27日にミュンヘンで世を去った。

### キルステン・フラグスタート

1935年メトロポリタン歌劇場で「ワルキューレ」の練習が行なわれたとき、フラグスタートがはじめて歌いはじめたその瞬間、その歌唱のあまりにすばらしいのに指揮者は驚嘆してバトンを落とし、ジークムント役の歌手はぼうぜんとして自分の出を忘れてしまったほどであった。

フラグスタートは1895年7月12日ノルウェーのハマルに生まれ、両親ともに音楽家であった。1913年オスローの国立歌劇場で「ティーフラント<低地>」(ダルベール作曲)にデビューし、1930年ごろからワグナー・オペラを専門として立つことにし、1932年ヨーテボリのオペラでイゾルデ役を歌って大成功を収めた。それ以後欧米各国で歌い、一流の歌劇場は彼女を迎えることを最大の誇りとするようになった。1933年バイロイト音楽祭に出演、翌年ジークリンデとグートルーネの役で大成功を収めた。これによってメトロポリタン歌劇場からも招かれ、前記のように1935年ジークリンデでセンセーショナルな成功を収め、1941年までこの劇場の主要歌手となった。1935年からはウィーンとロンドンに毎年のように出演し、南米でも歌った。

1951年舞台から引退する事を声明したが、ワグナー・オペラにおける彼女の声望は何人もしのぐことができず、懇望されてラジオやレコードの吹込みにたびたび参加した。1952年にはメトロポリタンでグルックの「アルチェステ」を歌い、ロンドンでパーセルの「ディドとエネアス」に出演し、1955年には2回のワグナー音楽会をニューヨークで開いた。ロンドン・レコードは数多くの名唱を録音したが、ショルティ指揮の「ラインの黄金」では62歳を以てフリッカの役を歌い、これを最後に病を得て、1962年12月7日、67歳で長逝した。

ワグナーの孫ヴィーラント・ワグナーによれば、20世紀のワグナー・ソプラノのうち、全く別格に扱わねばならぬ2人の歌手がある。それはフラグスタートとビルギット・ニルソンであって、この2人は一般のバイロイト水準では測り得ない偉大な芸術家であるという。私自身、1947年チューリヒの歌劇場でフラグスタートのイゾルデを聴いたことがある。51歳であったにもかかわらず、その声量豊かで清澄な美しさをもっていることには全く驚かされた。ことにテンポのゆっくりした部分の悠容として迫らざる表情と劇的高揚の堂々たる力強さは無比である。

フラグスタートは今次大戦中、夫君がノルウェーの親ナチ政府に重要な位置を占めていたと言うので、しばらく舞台に立つことができず、アメリカに渡ったときには、ボイコットにあたりしたが、芸術的には大成功であった。

### セツト・スヴァンホルム

スウェーデンの名テノールで、1904年9月2日ヴェステラスに生まれた。父が牧師を

していた教会のオルガニストとなった。1927年ストックホルム王立音楽院にはいり2年後卒業してストックホルムの教会合唱長となる。1930年同地の歌劇場に「道化師」のシルヴィオ役でデビュー、「フィガロ」などのバリトン役を演じたが、のちテノールとなり1936年ラダメス役でデビューした。1938年ブルーノ・ワルターに招かれてウィーン国立オペラに参加した。

ベルリン、ミュンヘン、プラーク、ブダペストなどでも歌い、1942年スカラ座、バイロイトなどに出演した。大戦中はレオ・ブレヒの指揮下でスウェーデンでたびたび歌った。1946年には「ピーター・グライムズ」の主役を外国人として初めて歌い、さらに同年南北アメリカにデビューした。その後はサンフランシスコおよびメトロポリタンでしばしば歌っている。1956年ストックホルム歌劇場監督となったが、1964年没。彼の最後の録音はショルティ指揮「ラインの黄金」におけるローゲの役である。

筆者は第2次大戦中ウィーンで彼を聴くことが出来た。彼の声は力強く、はば広い表現力を持ち、ワーグナーばかりでなく、「カルメン」のホセなども仲々よかった。しかしワーグナー・テナーとしては当時最高のひとりで「ジークフリート」の理想的歌手であった。1940年メトロポリタンに招かれたが、戦争のため行くことができず、戦後はいじめてこの劇場に出演した。

### アーノルド・ヴァン・ミル

オランダのバス歌手。1921年3月26日シーダムに生まれた。ロッテルダムとハーグの音楽学校に学んだ。1940年代のはじめに音楽会やラジオで歌い、のちハイルブロン歌劇場で「ナブッコ」のツァッカリアでデビューした。1947年のジュネーヴ・コンクールでは2等賞を得た。さらにアントワープやヴィスバーデンの歌劇場で歌い、1953年からはハンブルク国立歌劇場の主要歌手となった。

ワーグナー歌手としては重要な地位を占め、1951年以米バイロイトのワーグナー祭で歌い、1956年「オテンダ人」のダーラント役として、1957年よりは「トリスタン」のマルケ王、「マイスタージンガー」の夜番、「指輪」のファゾルトとして活躍しており、また、フンディング、「パルシファル」のティトゥレルとしても有名である。